

10/24 サムエル記第一 16章 1-13節「主は心を見る」

小池 宏明 牧師

民の熱烈な求めに応じて立てられたイスラエルの初代王サウルは、はじめの謙遜さが無くなり、次第に主の御声に聴き従わず、叱責されても言い訳をして、悔い改めることをしない、そんな高慢な王になっていった。サウルに油を注いだ預言者サムエルは、深く悲しんだ。(15章) 主なる神様も深く悲しまれたが、サムエルを慰め、励まして、次の王を立てるように命じられた。

*心を見る主の選び

16章に入ると、主なる神様は、サムエルにベツレヘムの町に行くように、そこに住むエッサイの息子を王にするように命じている。ベツレヘムと言え、かつて、未亡人となったナオミが嫁のルツを連れて戻った故郷がベツレヘムであった。そこで、ルツはボアズと出会い、結婚し、生まれたのがオベデ、さらにオベデの子がエッサイなのだ。そしてエッサイの息子の中に次の王がいると言う。エッサイには、8人の息子たちがいる。預言者サムエルと、息子たち8人の親であるエッサイも、誰が次の王様になるのか見抜くことができなかった。それは「・・・人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」(16:7b) からだ。こうして、少年ダビデが次の王として、密かに油注がれた。このダビデの子孫から救い主イエス・キリストが人として誕生するのだ。

*外見に囚われる私たち人間

まことに、人間は、他人の外見に捕らわれやすい者だ。いえ、「外見しか見えていない」と言っても言い過ぎではない。これは地上で生きる人間にとって仕方のないことかもしれない。しかし「仕方がない」と言って割り切れない、多くの問題が現実には起きている。いじめや差別の問題は、結局は外見の違い、言葉の違いに原因がある場合が多い。民族間の争いから障害者に対する差別やいじめ、会社内や学校内で起こるハラスメントやいじめ、など数え挙げれば切りがないほどだ。

「人はうわべを見るが、主は心を見る」今日は、この御ことばをよく覚えて、他人のうわべにばかりに心を動かされてしまいがちな自分自身を戒めたい。そして、私たちの心を見ておられる主なる神様の御前で、いつも、謙る者でありたい。

眼に見えることやはっきりしていることの方が、分かりやすいし頼りやすいものだが、私たちは、眼に見えない神様を信じ、その約束を信じて生きて行く「幸い」を知っている。眼には見えないものこそ永遠である。

いつまでも残る信仰、希望、愛に心を留める歩みを求め続けたい。